



TITLE:

戴震と皖派の學術

AUTHOR(S):

木下, 鐵矢

CITATION:

木下, 鐵矢. 戴震と皖派の學術. 東洋史研究 1986, 45(3): 519-542

ISSUE DATE:

1986-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154168>

RIGHT:

戴震と皖派の學術

木 下 鐵 矢

一

經濟學において、生理學における顯微鏡の役割りを果すのは抽象力であるとはマルクスの言葉であるが、これは歴史研究についてもまた然りということが出来るであらう。先づ第一に歴史研究の取り扱う資料の多くは文獻資料であり、第二にそれを分析し理解し一つの歴史像を構成する研究もまた徹頭徹尾言葉とそれに類する概念裝置を以て行なわれるのである。言語行爲のない歴史研究は有り得ない。そして言語行爲は、史料の形で果されてしまっているものにせよ、研究者が行うものにせよ、その本質において、個的なものを普遍の場に引き入れ、その限りにおいてこそ可能な規定を行う行爲に他ならないのである。

言語行爲は、いかに破れ目が多かろうとも、一つの體系をめざす行爲である。そしてその限り、その行爲は一つ一つのものをそれらがさらされている偶然性の暴力の海から引き離し、必然性のうちに安定させる秩序ある位置づけへと移しかえる行爲である。或る事象を言葉をもって分析し説明するとは、とりもなおさず、その事象の出現、存在、消滅を或る必然性の網の中へ織り込んで行くことであり、その事象にかかわる偶然を非本質的なものとして振り落して行く。

だが個的なものは本質的に偶然的であるからこそ個的なのである。このことを勘案せずして個的なものを把えることは

出来ないであろう。言葉によって必然性のうちに織り込まれてしまった事象は、普遍の場に投影された影としてのみ現われ、事象そのものの個的存在は把握されないままに、その歴史像が構成されるであろう。だがそのような歴史像はまさしく作られたものでしかない。無論歴史研究が言語をもって行なわれる以上、このことは本質的に避け得ないものである。だがそのような必然性のもとへの組み込みを事象のもつ偶然性によって攪亂し、必然性をめざす研究の齎らす歴史像を一つの抽象像として反省し、相對化しておくことは可能でもあるし、必要でもある。重要なのは、或る問題的概念設定のもとに非本質的として振り落されている情報を叮嚀に掘りおこし、洗い出し、その煩瑣と、偶然的性格によってそのような設定を批判的に相對化しつづける作業を怠らぬことである。

歴史的事象において最も根本的に個的なものであるのは各時代各社會に生死した一人一人の人間である。とするなら、言葉によってそれら個的な各個人の營みを設定された或る普遍の場に引き込んで行なわれる、歴史的規定と歴史像構成の、不可避性と有効性を一方に認めつつ、しかもその批判的相對化を行なうとは、今一度その各個人にもどって、それらの普遍的な規定と構成がそれぞれに差異を含まぬか、個人に即して見た場合に、そのような規定はどのような密度でそれぞれにおいて存在していたのかを測定しなおすことによって、先づは果されるであろう。

本稿が行なわんとするのは、戴震と皖派の學術についての從來の研究が必ずしも重視することを行なわなかった史料と情報を提示し、以上述べた如き攪亂と測定の手がかりとを、この方面での歴史理解に對して加えておくことである。

二

「皖派」とは、所謂「乾嘉の學」、或は一口に「清朝考證學」と呼ばれる、清朝中期に現われた學術運動を代表する學派の一つを指差す名稱である。安徽省徽州府休寧縣出身の戴震を先達とする學派であるところから、安徽省の雅名である「皖」を採って「皖派」と呼ばれる。

この「皖派」は、乾嘉期の經學を代表する今一つの學派である「吳派」と並稱され、それぞれが學派として認定される學風についても對比的に考えられるのが普通である。⁽¹⁾ 吳派とは、江蘇省蘇州府吳縣出身の惠棟、同太倉直隸州嘉定縣（もと蘇州府に屬す）出身の錢大昕など、蘇州を中心とする江蘇省出身の學者達を學派として括った名稱であり、「吳」とは廣く江蘇省を指差して「皖」に對する。⁽²⁾ すなわち、「吳派」という名稱を以て括ることは、そこに括られる學者達の出身地分を名實ともに示しているとしてよいのであるが、一方「皖派」の方はというと、その點幾分に名と實とが乖離している。

すなわち、この「皖派」を代表する學者として一般に言及されるのは段玉裁、王念孫、王引之であり、これに戴震を加えて、「戴段二王の學」という名稱も行なわれているのであるが、その段玉裁は江蘇省鎮江府金壇縣、王念孫、王引之父子は同じく江蘇省揚州府高郵州の出身であり、王父子は別に立てられた「揚州學派」の中に數えられることもあるのである。⁽³⁾ この點、「皖派」という名稱は、むしろ、この皖南徽州府出身の、他でもないこの戴震という學問的個性に由來する學派であるという了解が含まれた一種の固有名稱であると理解するのが最も適切であらう。

しかし一方、この「皖派」という名稱は、まさしく出身地方によって學派を括るという使用のされ方も爲されるのであって、戴震と同じ徽州府、婺源縣出身の江永をこの「皖派」に含めるのは極く普通のことであるし、⁽⁴⁾ 更に同徽州府歙縣出身の程瑤田、金榜などもこの「皖派」の名稱のもとに括られるのである。⁽⁵⁾ 江永、字は慎修、康熙二十年（一六八一）に生まれ、乾隆二十七年（一七六二）に卒す。程瑤田、字は易田、一に易疇、雍正三年（一七二五）に生まれ、嘉慶十九年（一八一四）に卒す。金榜、字は輔之、一に藥中、雍正十三年（一七三五）に生まれ、嘉慶六年（一八〇一）に卒す。更に、戴震、字は慎修、一に東原、雍正元年（この年の十二月二十四日、これは西曆一七二四年一月十九日に當る）に生まれ、乾隆四十二年（一七七七）に卒す。洪榜の「戴先生行狀」⁽⁶⁾ に、「時に先生の同志密友、郡人の鄭牧、江肇龍、程瑤田、方矩、金榜の六七君、日々江先生（即ち江永）方先生（即ち方葵如）に従ひ、從容として質疑問難す」と言及される人々である（後述、一〇七頁）。

すなわち、この「皖派」という名稱によって括られる學者達には、實のところ、戴震を中心として二様のグループが先づは見分けられるのであって、一つは戴震が家郷に居た時代に出會ひ討論を交した人々、それはまさしく皖南徽州において形成された學者達であり、今一つは、彼が三十二歳の年、即ち乾隆十九年（一七五四）に京師にのぼり、一躍その學名を知られて以後に形成された、出身に關してはむしろ非徽州、⁽⁸⁾學派に括られる學者達である。そしてこの「皖派」に一括される學者達を以上の如く差異づけることは、實はまた「皖派」と一括される學風のうちに或る差異を見分けることを齎らし、更に言わばその中間にあつて媒介者となつてゐる者として戴震の學問を把えかえす必要を齎らすであらう。

三

今見分けた皖派のうちの二つのグループの間にある差異の性格づけを行なうためには、さまざまな點からの取り扱いが必要である。すなわち、(1)彼らの學問的業績に就いてその具體的な形と内容を比較討究すること、(2)彼らの個人史に就いて、(a)就中彼らがどのようにして學問的研究の道、更に限定すれば「經學」のうちに踏み込んでいったのかを、そして(b)第一のグループが徽州府において獨自に形成されたとするなら、その徽州府の土地柄の中でそれらの人々を、そしてその學問を考察し、(3)彼らのうちで何故に戴震こそが第二のグループの方向への學派形成を行ない得たのかを考えるという諸點である。

四

かつて私は、戴震の音韻學を分析し、その音韻學の究明せんとした對象が、汎時論的な人間の音聲の體系であり、その汎時論的性格は、人間の口腔器という肉體的形狀と能力のまさしく汎時的な構造において考えられていたこと、更にこの點で、段玉裁等の、音韻の歴史的變化を嚴重に受けとめ、その點での時代區分を堅持して、「經書」の時代の音韻をこ

そ、その同時代的情報（例えば『詩經』の押韻狀況、諧聲字の聲符による系列性、異體字關係等）の實證的研究にのみ基づいて究明しようとする歴史的音韻學と對蹠的な位置にあることを述べたことがある。⁽⁹⁾ この分析は今述べたところの第一點にかかわっているだろう。

更にこの點で示唆する所の多いのは、平田昌司氏の『審音』と象數——皖派音學史稿序説」と題する論文である。⁽¹⁰⁾ その指摘されるところは第一點にかかわり、更に第二點の(b)に及ぶので、今少しく紹介しておきたい。氏は、先づ「いま論じようとするのは、皖派の學問を支えるよりどころとしての音韻學がどのような特徴をもち、いかに繼承されたかの過程である」とされた上で、次のような指摘を行なわれた。(1)皖派の音韻學の任い手、江永、戴震、段玉裁、王念孫たちを、皖派として一括して言うことの不適切であること。(2)清朝音韻學史の理解においては、「考古」（古代音韻の研究を、當の古代文獻の實證にのみ基づいて行い、後世の學問、特に等韻學をまじえることを排する）と、「審音」（音韻學においては、人間の發音それ自體の汎時的な生理、構造の究明が重要であり、古代音韻學もその成果によって勘案されてこそ完全たり得る）との二派のかかわりが重要である。大まかには、江永、戴震は審音派、段玉裁、王念孫は考古派となる。(3)江永、戴震は、安徽省徽州府、段氏王氏は江蘇省出身であり、この「審音」派はすべて安徽省に發展した音韻學であると考えられる。(4)江永については、同じ安徽省（ただし安慶府桐城縣）出身の方以智からの系譜が重視される。方氏の音韻學には、明瞭に、明末に及ぶ耶蘇會士渡來と相關して、等韻學への好尚が見られ、また、音聲體系の背後に象數の存在をおくことが見分けられるが、この兩面は確かに江永に繼承されている。(5)江永から戴震への繼承は、「審音」における泰西及び象數の排除、ひきつづく「考古」への同化という過程である。このことは、戴氏の例えば『孟子字義疏證』における釋氏異端への排斥と並行し、また彼の曆算學が西法を利用しつつ、中國固有の形に還元しようとしたものであることと軌を一にする。(6)方氏江氏における音韻學と象數學との結びつきは、宋代邵雍『皇極經世書』卷四「聲音唱和之圖」の思想の繼承である。このことは、朱子の故郷である皖南にすぐれて存在した朱子學、象數學の傳統の中でこそ理解される。戴氏もまた独自の「理」の考え方に

より象數を驅逐したが、しかし「理」なるものを把握せんとする點で、やはりこの傳統のうちにある。(7)『審音』とは、朱子學的世界を音聲のうちにも見いだせると信じ、その方法としてもと音聲の體系を追求していた等韻學をえらびとることによってなりたつた一つの立場ではなかったか。その成立の最大要因は、皖南における朱子學の隆盛であり、第二に、『西學』の傳來、清朝の『國語』である滿洲語との接觸による等韻學の再發見ではなかったか。さらに『審音』をさえた象數學は、地方性を示す學問である。『四庫全書總目』子部術數類數學之屬、つまり『皇極經世書』およびその注釋を含む部門について、邵雍以後の著者三十二人の出身のうちわけを調査すると、江西の八人を最高に、福建の四人、安徽、湖南、江蘇、陝西の三人とつづき、江西と象數學の結びつきがみられるのである。そして、皖南は、象數學の榮えた土地の中心にあたると言ってよい。『考古』が吳（即ち江蘇省——木下）において展開したのは、朱子學の拘束からの自由さゆえにであり、ここにおいてはじめて古音のための古音學が存在しえたのである。『審音』は、かたわらより古音學の構造化に協力したのち、象數、『西學』という二つの支柱を戴震によって失い、段玉裁の『考古』へと吸収されるに至る。／『審音』あるいは皖の學問のもつ、理論的緻密さという特色は、山間の學問であるために『博』よりも『精』をえらぶことを強いられたといった條件にもよるであらう。だが、朱子學、象數學のもつ宇宙論とそうした緻密さとの形影の關係はたしかに存在するのである」と。

今一つの補足を行なっておくと、平田氏は「審音」派が西學の傳來とかかわって形成されたという點、すなわちそれが「世界史」の廣がりの中でこそ形成されたものであることを述べておられるが、實は、「考古」派も含めて、この時代に形成深化が行なわれ、まさに清朝經學の水準を支えた古代音韻學の進展そのものが、「世界史」の中でこそ可能であつたということである。すなわち、清朝古代音韻學の基礎は顧炎武の「音學五書」、就中そこにおける古代音韻に存在する十部分類の洞察にあるのだが、顧氏自身その「音學五書序」の中で、「炎武潛心すること有年、既に廣韻の書を得て、乃ち始めて中に發悟し、而して其の說に旁通す。是に於て唐人に據りて以て宋人の失を正し、古經に據りて以て沈氏唐人の失

を正す。而して三代以上の音、部分秩如として、至曠にして亂す可からず」と述べる如く、彼における『廣韻』との出會いこそがその洞察を齎したのであった。すなわち彼は、『廣韻』二〇六韻分類のうちに分屬する各文字に對し、明代中期の陳第に由來する古代音の實證法を施してこの二〇六韻を組み換え、そこに古代音そのものの韻部分類が洞察されたのであった。⁽¹¹⁾ところで、この『廣韻』の二〇六韻そのものが、例えば尾崎雄二郎氏が述べられるごとく、佛教東傳にともない傳えられた、『梵語學、インド古典音聲學の、精密な音聲觀察とそれにもとづく學的原理』に由來するものであった。⁽¹²⁾また平田氏も指摘されるごとく、江永、戴震の「審音」派は等韻學を再發見し、その示す音聲體系表によってその音韻學を形成し、古代音韻學の構造化に寄與したのであるが、この等韻學もまた梵僧の知識に由來するものであったのである。⁽¹³⁾すなわち清朝音韻學が、古代音韻についての體系的、洞察を行なうという學的能力を形成したのは、遠く古代インドの古典音聲學へと豁けている世界史の汀においてこそであったのである。

平田氏の指摘されるところにもどれば、それらが多彩にして着實なものであることは言うを要しないであらう。ただ私が疑問を呈したいのは、朱子學なり象數學なりの地方性を述べられる際に餘りにも抽象的に學統といった系統の存在を考えておられることである。特に『四庫全書總目』術數類數學之屬についての出身の統計を示されるのは、これのみではほとんど統計としても意味がないと思う。更に徽州を山閒地方とのみ考えておられる節があるが、まさにこの江永、戴震の時代に中國商業界の一大勢力であった「徽商」の故郷として、この地方が注目され、その社會經濟史的研究を中心とする地方史的研究が進捗しつつある今日、⁽¹⁴⁾より緻密にこれらの學者の営みをこの地方に引きもどして考察する必要があるだろう。要は、學統を考えるにしても、各學者の個人史、更に當時の地方史にもどして、その差異と密度を具體的に測定することである。

五

だがそのことを考える前に、今彼らの音韻學の間に存在する差異について紹介した分析を勘案しつつ、皖派の中の二つのグループが示す學問の相異を簡單に性格づけておきたい。

彼らの音韻學が示すのは、江氏戴氏にあっては、人間の音聲という物の當體を究明する方向が主であり、一方段氏王氏にあっては、古典文獻によつて古典的音韻を分析し究明するという方向が主であるということである。少しく抽象すれば、一方は物の當體を知りたいという精神を示し、一方は文獻（就中經書）をそれが文獻として示す限りにおいて知りたいという精神を示す。物の當體を知りたいという精神にあっては、例えばそれが「經書」に向えば、そこに物の當體が存在するのである。文字もそうであるし、そこに載せられる天文、地理、禮制度、樂律、更にはその經書全體の當體、即ち「聖人」の精神、更にその當體である「道」、という具合にである。一方後者は、最初から常に、いわば生來的に、一種の知的興味の制限を身に帶びている。前者の精神は、かくして博物學的にならざるを得ぬが、ただし、「博」というよりは、各個の物の當體を精確に把捉したいという意欲が中心にある限り、究物學（誤解の恐れなしともしないが窮理學といつてもよからう）といった言い方の方が良いかもしれない。そしてまさしく我々が第一のグループに擧げた江氏、戴氏、程瑤田、金榜などの業績に見られるのはこのような精神である。例えば、彼らの業績にはいづれも「禮」についての研究が含まれるが、それらは「禮」文獻の研究というよりは、禮の制度の當體としての研究であると言ふことが出来る。

程瑤田の『通藝錄』にまとめられている諸篇は彼らの學風の一つの形を示すが、例えばその「九穀考」が『說文解字』をはじめ諸經傳の説を反復疏通し、「既にして又た博く農民相沿の語に稽へ、之を播穫の時に驗し、諸を五方土宜の同異に參じ、而して之を論説し、以て篇に著はす」と序して、章中例えば「余細かに農人に詢ひ、又た目驗するを以て之を知る」など述べることを、またその「考工創物小記」などが多くの圖解を載せて説くこと、これに思い併せるに江永はその

音韻學の著述の中で當時の方言を論據としてよく引用し、戴震にも『考工記圖』という圖解の書が有り、また、かつて古代の渾天儀を復元し、自ら工匠に指圖して作らせたことが有ることなどを見るに、彼らの學問的精神が、物の當體としての具像的な知識を求め、また逆に知識の具像化を好んだことが分かるのである。一言でいえば、技術家的精神、或は作圖的精神といったものが彼らの學問には存在する。

六

戴震が自らの學問的な生い立ちを回想した文章として次のようなものがある。

1 僕は少き時より家貧しく、親師を獲ず、聖人の中に孔子なる者有りて六經を定め後の人に示すと聞き、其の一經を求め、啓きて之を讀むも、茫茫然として覺る無し。尋思するの久しきに、心に計りて曰く、「經の至れる者は道也、道を明らかにする所以の者は其の詞也、詞を成す所以の者は字也、字に由りて以て其の詞に通じ、詞に由りて以て其の道に通ずれば、必らず漸すること有らん」と。所謂字なるものを求め、諸を篆書に考へ、許氏の『說文解字』を得て、三年にして其の節目を知り、漸く古の聖人の（漢字）制作の本始を窺ふ。又た許氏の故訓に於て未だ能く盡さざるを疑ひ、友人従り『十三經注疏』を假りて之を讀み、則ち、一字の義は、當に羣經を貫き、六書に本づきて然る後に定れるものと爲すべきことを知る。（『戴東原文集』卷九「與是仲明論學書」、乾隆癸酉、一七五三、三十一歲）

これ以下、更に「經の明らかにし難きが若きに至りては尙ほ若干の事有り」として、天文學、古代音韻學、歴史地理、考工器物、鳥獸虫魚草木の狀類名號、算學等についての精確な知識の必要なことを説き、

2 之を爲すこと又十年、漸く經に於て會通する所有りて、然る後に聖人の道は繩を縣け、槩を樹つる（測量する）が若く、毫釐も差ふこと有る可からざるを知る。

と結んでいる。ここに述べられている年數を溯れば、恐らくは十七、八歳（滿十五、六）の頃以前に經書に出會い、『說文解

字』に沈潜し、『十三經注疏』を人に借りて讀んだことになる。これはその死の年の正月十四日（一七七七年二月二十一日）附けの段玉裁宛ての書簡に、⁽¹⁸⁾「僕は十七歳の時自り道を聞くに志すこと有りて謂へらく、之を六經孔孟に求むるに非ざれば得ず、字義制度名物に従事するに非ざれば由りて以て其の語言に通ずる無し、と。宋儒の訓詁の學を譏りて語言文字を輕んずるは、是れ、江河を渡らんと欲して舟楫を棄て、高きに登らんと欲して階梯無き也。之を爲すこと卅餘年、灼然として知りぬ、古今治亂の源の是に在るを」と云うのと正に軌を一にする。と同時に、これは、この十七歳前後における自らの出發と、當時自らが心計するに至ったものが、常に、晩年に至るまで回想され、彼自身の生涯を論理づける起點として意味づけられていたことを示す。そうである限り、この出發の時の體驗は本質的な重要性を彼においてもつ。

この文章の冒頭が述べる事柄、「茫茫然として覺る無し」の體驗が何時のことかは確定出来ないが、それにしても、この一節は私の目を打つ。というのも、當時、學者としては天下第一とも稱せられる人物なら、幼年時代より四書五經を暗唱させられており、氣がついた時にはこれらがすらすらと口を衝いて出る状態になっていたに違いないと、私は單純に思っていたからである。⁽¹⁹⁾だが、戴震がここで述べている事態は當時決して珍しくはない事柄であつた。そのような事例を次に紹介しておこう。

七

先づ第一に、江永もまた同じような生い立ちであつたことが、他ならぬ戴震によつて伝えられている。

3 先生、姓は江氏、名は永、字は慎修、婺源江灣の人。^{をよな}少くして外傳に就きし時、里中の童子と世俗の學を治む。一日、明の丘氏『大學衍義補』の書を見るに、内に『周禮』を徵引す。之を奇とし、諸^{しよ}を積書家に求めて『周禮』の正文を寫すを得、朝夕諷誦す。是れ自り遂に前人合集する所の『十三經注疏』なる者に精心す、而して三禮に於て尤も功深し。（『戴震文集』卷十二、「江慎修先生事略狀」、乾隆二十七年、一七六二、五月に執筆されている。江永の死は同年の三月十三

日、一七六二年四月六日、である。）

この同じ文章によると、江永は嘗て、乾隆五、六年の頃に一度、同郡の程恂の延まねきにより京師に至り、三禮館總裁方苞、及び吳紱と禮經周禮について答難し、兩者を折服させたことが有るが、遂に生涯徽州の地に在って、その學問も、自らとしては特に知られることなく終っている。それが廣く京師の學者達に知られるようになったのは主に戴震の紹介による。戴氏自身、この文章の中で、

4 ……先生は自ら、頽然として老に就くを顧みて謂へらく、復た用ふ可き無し、と。又た昔京師に至り與に遊せし所、皆在る者無ければ、愈々益々感愴し、乃ち辭謝す。而して戴震に與へし書に曰く、「名場に馳逐するは素心に非ず」と。卒に強いて起こす能はず。其の後、戴震嘗て都に入り、秦尙書蕙田之を客とするに、書笥中に先生の歷學數篇有るを見て、其の書を奇とす。戴震困りて爲に先生を言ふ。尙書、『五禮通考』を撰ぶに、先生の說を摭ひて觀象授時の一類に入れ、而して『推步法解』は則ち全書を取りて載入し、先生の『禮經綱目』を見るを獲ざるを憾む也。

と傳え、錢大昕『潛研堂文集』卷三十三、「與戴東原書」には、

5 前に足下に曉嵐（紀昀）の所に遇ふに、足下盛んに、婺源江氏推歩の學は宣城（梅文鼎）の下に在らずと稱す。僕、足下の言は是れ信ならんと惟ひ、即ちただに其の書を得て之を讀まざるを恨む。（中略、遂に讀むを得たことを述べ、江氏の論定に對する批判を行なっている。）當今、學の天人に通ずる者、足下に如くは莫し、而るに獨り江を推して異辭無し。豈に少わきとき江に習ひ而して特に之が延譽を爲せる耶、抑々更に說有りて以て僕の惑を解く耶、請らくは再び之を足下に質す。

と有つて、戴氏が事實、江氏の學問を京師に宣揚していたことが知られる。

戴震が江永に出會つたのは、その二十八歳の年、乾隆十五年（一七五〇）、徽州府歙縣の紫陽書院においてである。⁽²⁰⁾時に

江氏は七十歳であつた。ただし、戴氏の學問は既にこの時一家をなす程のものであつたと考えられる(下に引く12を参照)。この前後のことは、洪榜の『戴先生行狀』に詳しいが、それには、

6 (戴) 先生、(江氏を)一見して心を傾ぶく、因りて平日學びし所を取り、就きて質正す焉。江先生、其の盛年にして博學なるを見、相ひ得て甚だ歡ぶ。一日、歷算中の數事を擧げて先生に問ひて曰く、「吾れ疑ふ所有るも、十餘年未だ決する能はず」と。先生、其の書を請ひ、之を諦觀し、因りて剖析比較を爲し、其の然る所以を言ふ。江先生驚喜、歎じて曰く、「累歳の疑ひ、一日にして釋けたり、其の敏なること及ぶ可からず」と。先生も亦た、江先生の學の周詳精整なるを歎ず。

と有つて、彼らが獨自に育てて來た學問が、その學問的精神の形を含めて、契を合するが如くかみ合い、質疑問難する様が傳えられている。

このような兩者に於ける心契の經驗は、互いが、それぞれの學問的な生い立ちのうちに有る或る同型性を感じとり、それによつてこそ深い共感的理解を示し合うということを含むであらう。間接的なものではあるが、このことを示す二つの證言を今引いておこう。一つは錢大昕の「江先生永傳」中の一節である。

7 休寧の戴震、少きとき郷曲に譽れあらず。(江)先生獨り、之を重じ、引きて忘年の交りを爲す。震の學は諸を先生に得るもの多しと爲す。(『潛研堂文集』卷三十九)

今一つは、汪中の「大清故貢生汪君墓誌銘」の中の一節である。

8 國初以來、學士の有明の習ひを陋とし、大業に潛心して六藝に通ずる者は數家、故に儒學に于て盛んと爲す。乾隆の初紀に及び、老師暑ぼ盡く、而して處士の江慎修、婺源に崛起し、休寧の戴東原之に繼ぎ、經籍の道の復た明らかなること此に始まる。兩人は末流に自奮して、常に郷俗の怪しむ所と爲り、又た孤介にして、合ふ所少なし、而して地は僻陋なれば従ひて書を得る無し。(『述學』卷六)

戴震が江永の死の二ヶ月後に、その名と學問の湮没するのを恐れて執筆した「江慎修先生事略狀」の冒頭(3)に他句をはさまず、江氏の學問の起點となつた、江氏と『周禮』との出会いを伝えるのは、決してあながちに爲されたものではないであらう。王昶の「江慎修先生墓誌銘」は、戴震の依頼によって書かれたものであるが、その間の事情を次の如く述べる。

9 余が友、休寧の戴君東原は所謂天地人に通ずるの儒也。常に自ら、其の學術の實は之を江慎修先生に本づくものなるを述ぶ。乾隆二十七年三月先生卒す。是の年東原は郷に擧げられ、明年京師に來りて先生を誌す所以の者を求むるも、卒卒として果さず。又た十餘年、余蜀より朝に還り、而して東原は薦を以て庶吉士を授けられ、四庫館の書を校理す。是に於て自ら爲る所の狀及び汪世重等の年譜を取りて、余に之を銘するを屬す。(『碑傳集』卷一三三所載による)

戴氏の心事をここに計るべきであらうが、また王昶の筆では、恐らく今の文中に言う「年譜」によってであらう、いかにも墓誌銘らしく、

10 先生、名は永……生六歳にして書を読み日々數千言を記ゆ。嘗て明丘氏の『大學衍義補』を見るに……という形になっていることにも注意を拂うべきであらう。

八

今引用した洪榜「行狀」の一節(6)は、以下、

11 時に先生の同志密友、郡人の鄭牧、汪肇龍、程瑤田、方矩、金榜の六七君、日々江先生、方先生に従ひ、從容として質疑難す。(九七頁に既に引く)

と續き、家郷時代における戴震の交友を伝えるが、程瑤田の「五友記」(『通藝錄』中の『修辭餘鈔』に收む)は直接の證言として次の如く述べる。

12 庚午（乾隆十五年、一七五〇）辛未（同十六年、一七五一）の間、余は稚川（汪肇龍）及び余の姉婿汪松岑と三人研席を同じくす。毎に當世の士の交わりて講習の益を資る可き者を論ずるに、余は戴東原也と曰ふ。東原、名は震。休寧隆阜の人。是に先だちて、己巳の歳（乾隆十四年、一七四九、戴震は二十七歳、程瑤田は二十五歳）、余は初めて東原を識る。是の時に當り東原は方に小試に蹟くも、而るに學は已に粗ぼ成り、其の校する所の『太傳禮』を出して余に示す。『太傳禮』なる者は、人多く治めざれば、故に經傳錯互し、字句譌脱して、學者恆に其の難讀に苦しむ。東原、一に之を更正す。余は讀みて驚きたり焉。遂に東原と交わりを定む。是にに至り、稚川、松岑も亦た咸な東原に交わる矣。壬申（乾隆十七年、一七五二）の夏、松岑、其の從祖の弟、在湘（汪梧鳳）に言ふ。在湘因りて東原を延げば、其の家に至り以て其の子に教ふ。是に於て余數人、時時に東原と處れり。故に東原を知ること最も深き也。

戴震が汪梧鳳の家にあったことは、先に引いた汪中の「大清故貢生汪君墓誌銘」（8）が續けて述べている部分にも見えるが、これら（11、12）に言及される汪肇龍の傳記を次に紹介し、今我々が問題としてゐる戴震の回想（1）を相對化しておきたい。すなわち、鄭虎文の「汪明經肇龍家傳」である。

13 今皇上御極の三十八年、歲次癸巳（一七七三）、詔して永樂大典を修め、四庫館を開き、廣く遺書を天下に求む。安徽學臣朱學士筠、婺源の汪氏紱、江氏永兩先生の遺書を以て之を朝に上し、兩先生の主を禮送して郡城紫陽山子朱子祠に入れ、春秋に配享す。時に余、祠旁書院の古懷德堂に主講する者、已に六載、因りて上す所の書を讀むを得、而して盡く、兩先生の高第弟子と交わる。……江氏の學を傳ふる者は、首に休寧の東原戴氏震を稱し、歙の松麓汪氏肇龍、及び鄭氏用牧、程氏易田、汪氏在湘、方氏晞原（方矩）、金氏藥中の六七君皆名を知らる。而して歙の篤行君子を稱するは、則ち必らず、稚川先生と曰ふ。稚川と云ふは、汪君松麓の字也。

君は郡城の某里に居す。先世は隱德耀かず、考某妣某氏三子を生む。君は少くして孤、又た善く病す。兄は夭して嫂は寡となり、而して弟は弱く、家は徒に四壁立つのみ。年十三、甫めて書を童子師に受くも、尋いで廢罷し、力食

して以て饘粥を供す。長じて、賈を習へば、則ち喟然として曰く、「是れ、甚だ巧僞なるに非ざれば、善賈と稱せらるるを得ず」と。立ちどころに棄てて歸り、篆刻を習ひ、鐵筆を資りて以て活くる者之を久しくし、稍稍六書に通ず。君の族、今の侍御、名は存寬なる者（注存寬、乾隆十九年進士、二甲六名）之を器とし、之に學を勸むれば、則ち大いに喜び、從ひて章句を受く。年二十有二たり矣。（肇龍の生年は康熙六十一年、一七二二、戴震より一歳年長である）。是より學に委己して、寢食を忘るに至り、四子書、五經、左國の大義に通ず。……後、江門に遊び、専ら經を治むるに力むれば、則ち宋の王氏伯厚、本朝の閻氏百詩に梯階し、而して漢の康成を以て宗主と爲す。是に於て『爾雅』、『說文』、諸々の小學書以て及び水經、地理、步算、鍾律、音韻、器數、名物の學、羣籍を博綜して考據の精審ならざるは無し。而して三禮に於て尤も功深し。師友の間、咸な其の精心果力なるに服し、隱然、不朽の業を以て相ひ期待す矣。

庚辰（乾隆二十五年、一七六〇）、學官の弟子に補せらる。壬午（乾隆二十七年、一七六二）、東原、郷に擧げられ、君も亦た副榜を以て太學に貢入せらる。乙酉（乾隆三十年、一七六五）、駕南巡し、藥中（金榜）召試に應じ、内閣中書舍人を授けらる。君偕に京師に遊ぶ。京師の公卿、東原を知る者、亦た君を知り、咸な君を招致するも、君は顧だ獨り嗤しみて余が延きに就き、余が亡兒師雍に課す。是を用て君を知ること深し。……是の年、京兆の試に應ずるも下第し、歸る。歸りて猶ほ一たび省試に赴くも、遂に意を進取するに絶つ。日々未だ見ざる所の書を讀み、悉く資りて以て考據し、而して學益々深し。庚寅（乾隆三十五年、一七七〇）、易田（程瑤田）は賢書に登り（郷試に及第し）、壬辰（乾隆三十七年、一七七二）、藥中は殿試第一に擧げらる。東原は尋いで經學を以て徵せられて四庫館纂修と爲り、編修を授けらる。而るに君は故より落落として遇ふ所無く、簞瓢陋巷にして晏如たる也。

君の弟肇溶、湖南の益陽に賈ふこと有年たり矣。君は之を念ひて置かず、又た自ら、就衰子無きを顧み、鬱鬱として自得せず。丙申（乾隆四十一年、一七七六）の春、一妾を挈ぎ、往きて肇溶に従ふ。居ること數歲、妾を遣りて去らしむ。竟ひに後無くして卒す。君は長身玉立、鬚眉は神の若く、見る者は知りて有道の士と爲す。顧だ色は精充なら

ず、聲は氣斂ならず、余素より其の大年無きを憂ふ。君の楚に遊ぶの明年に逮び、余將に新安を去らんとす。而して東原初めて歿す。因りて書を君に寓せ、其の早に三禮の書を勒成せんことを諷するも、然れども意はず、君の果して是に至る也。（『碑傳集』卷二三所載による）

以下も引用したいのであるが、ここで切ろう。この一文、同じく徽州に育ち「盛年」（6を見よ）の時代に互いの學問を形成し合った人々が、まさに「皖派」として天下に認められていく歴史に側面から光をあてて、興味深い。鄭虎文の筆致自體がそのような意圖を示している。例えば、この遂に家郷から遠く楚の地に湮没していった汪肇龍と、戴震とは、どれ程の相違をもつのだろうか。

錢大昕の「戴先生震傳」は、

14 性は介特、多く物と忤ひ、落落として自得せず、年三十餘、策蹇して京師に至る。逆旅に困しみ、饘粥幾ど繼がず、人皆な目して狂生と爲す。一日、其の著す所の書を攜えて予が齋を過る。談論すること竟日。既に去れば、予之を目送し、嘆じて曰く、「天下の奇才也」と。（『潛研堂文集』卷三九）

と、戴震の風貌を傳えるが、そこには、鄭氏が汪肇龍について「落落として遇ふ所無く」「鬱鬱として自得せず」と言うのと同じ觀察が見られる。そして彼らがそれぞれにどのようにして學問のうちに入り込み、どのようにして都にのぼり、家郷にとり残されたのかを考えるなら、そこに有る心情において、深い同型性が存在すると見分けることが出来るのではないだろうか。

九

徽州以外の例を二つ加えておく。一つは錢大昕の「錢處士行狀」が傳える、彼の一族錢民の場合である。

15 處士、姓は錢氏、諱は民、字は子仁、一に生翁と字す。嘉定縣外岡里の人。早に孤たり。十三、書を棄てて賈を學

ぶも、數々郷里の侮る所と爲る。乃ち歎じて曰く、「世は多く妄人、その妄ならざる者を求むれば、聖賢而已」と。初め名は樞、字は子辰なるも、許魯齋（許衡）の教ふるに民の名を以てするを夢み、覺めて思ひて曰く、「聖人の民に於けるや、亦た類する也」と。遂に今の名に易ふ。慨然として聖を學ぶの志有り。青浦に孔子の衣冠と墓有りと聞き、日を擇び、齋戒して往謁す。願ふらくは聖人の徒と爲らんと。是の夜、夢に己に告ぐる者有りて曰く、「漢以來の諸儒の論説を謝絶せば、乃ち學を爲す可し」と。是より始めて四書の正文を讀む。年已に三十たり矣。……處士の没せしより已に七十餘年、子孫に能く書を讀む者無く、遺文存すると雖へども、吾は後人の用ひて鑿甌を覆ふことを恐るる也。因りて其の行なひを敘次すること右の如し。（『潛研堂文集』卷五〇）

今一つは、「皖派」の學者のうちに數えられる凌廷堪の場合である。

16 凌君、諱は廷堪、字は次仲、安徽歙縣の人。……父の文煊、海州に業賣す。君は海州に生まる。六歳にして孤たり。窮巷中に困苦し、母の王氏は簪珥を鬻る。塾師に就くも顯し姓名を記す而已。去りて賈を學ぶも成らず。年二十餘、始めて復た書を讀み學に嚮ひ、能く屬文す。（阮元『聖經室二集』卷四、「次仲凌君傳」）

以上まとめると、彼らにおいては、(1)父親等が讀書人でなく、(2)貧または孤であつて自らが家計を築かねばならず、(3)そのような子弟としては商賈となることが社會的に彼らに期待される、生き方であり、(4)「塾」と呼ばれる初等教育を一樣に受けているが、そこでは「俗學」(3)が主で彼らの興味を特に引き出すような教育は行なわれておらず、(5)やがて、商賈としての生き方に性分が向いていないことの自覺から、或いは自ら生の形で「經書」に出會う(1、3)という體驗を経て學問の道に入つて行き、(6)同時に「科擧」の制度に素直にはしたがわれない頭になつてしまつてゐるために、當時の知識人の仲間の中では、それとしての出世に苦勞、乃至絶意という屈曲を生涯行いつづけた、という諸點を共通に見い出

すことが出来るだろう。

一〇

次に目を轉じて、皖派の第二のグループを代表する段玉裁、王念孫、それに吳派を代表する錢大昕の場合を見るに、以上の人々とは全く違う學問的生い立ちを見いだすことが出来る。

段玉裁、字は若膺、號は茂堂。曾祖武、祖文、考世續、皆な生員となっており、讀書人の家柄である。六歳、祖父に從いて發蒙をうけ、七歳、『論語』の暗唱を始め、八歳、叔祖父段郁文に從い讀書す、九歳、父考に從い、十歳、叔祖父段雍文に從い、十一より十四歳まではまた父考に從いて讀書し、十三歳、學使者の童子試に應じ、能く、『小學』『四子書』『詩』『書』『易』『周禮』『禮記』『春秋左氏』及び『胡傳』を背誦す。江蘇學使者尹會一の覺えめでたく、入泮を許され、特に無錫高氏所注の朱子『小學』一部二冊を授けられている。（『經韻樓集』卷八、「博陵尹師所賜朱子小學恭跋」の自述に據る。）

王念孫、字は懷祖、號は石臞。高祖開運、高郵州學生員、曾祖式相、康熙十七年（一六七八）副榜貢生、祖曾祿、雍正元年（一七二三）貢生、考安國、雍正二年（一七二四）會試第一名、殿試第一甲第二名、吏部尙書に至る。四歳、能く『尙書』を読み、立て板に水の如く誦した。考安國自ら口授を行い、一時の都下に神童の目有り、七歳、父考とともに東行するに、同行の某氏夜に奏稿を作りて經傳を援く、錯誤有るを恐れ、王念孫に詢う、念孫は熟睡するも、聲に應じて之を誦し、一字の謬誤も無し、十歳、『十三經』を暗唱すること畢り、『史』『鑑』に及ぶ。是の年、父安國は、都下にあつた戴震を延ぎ、念孫に命じて經を受けしめた。十八歳、童子試に應ず、州試第二、二十二歳（乾隆三十）、高宗江南に巡行す、念孫は大臣の子なるを以て迎え、頒冊を獻ず、詔有りて舉人を賜ふ。三十二歳（乾隆四十年乙未）、是の年までに會試に赴くこと四たび、皆中せず、是の年に中す、殿試第二甲七名。（『高郵王氏六葉傳狀碑誌集』卷四、王引之「石臞府君行狀」、『明清進士題名碑錄索引』上海古籍出版社、一九八〇、に據る。）

因みに、戴震は、四十歳（乾隆二十七年、一七六二）に舉人、都合五回會試に中せず、五十一歳、舉人を以て特に召されて四庫館纂修官となり、五十二歳、特に旨を得て、乙未（翌乾隆四十年）の會試及第者とともに、殿試に参加することが預め許され、五十三歳、かくしてこの年の殿試にのぞんだのであった。すなわち、王念孫と同じ殿試である。戴震は、第三甲四十三名、くり返せば、王氏は第二甲七名。ここで兩名の、特に戴震の心事について何事かを思うべきかもしれない。（洪榜『行狀』、同上『題名碑錄』に據る。）

錢大昕、字は曉徵、一に及之、號は辛楣、又た竹汀居士。祖王炯、年三十三始めて學官の弟子に補せらる。家貧しければ課徒するを以て自給す。考桂發、年四十に近くして始めて學官の弟子に補せらる。子の大昕の通籍登朝するに及び、遂に意を進取するに絶ち、詩酒を以て自ら娛しむ。祖王炯、年六十を踰えて始めて孫大昕を得、生まれて一年、即ち字を識るを教え、五歳のころより親しく經書を授け、稍々暇なれば即ち與に前代の故事を講論し、詳悉に指示し、記憶して忘るること勿から俾めて乃ち止む。是の如き者、殆ど十年であつた。十一歳、始めて童子試に應ず。（『潛研堂文集』卷五〇、「先大父贈奉政大夫府君家傳」、同「先考贈中憲大夫府君家傳」、『竹汀居士自訂年譜』⁽²¹⁾に據る。）

以上まとめると、彼らに共通するものとして次のような諸點が擧げられよう。(1) いづれも讀書人の家柄であり、(2) ただし、それとしても大名族の家柄というのではなく、生員程度に止どまる二乃至三代を経て、その意味では實直な、しかしこれからこの方向での家運を開いて行くという期待を次世代に強く持っている家柄である。(3) 彼らはそのような期待のもとに生まれ（段氏王氏については特に、出生に際しての父祖の強い期待を傳える挿話が存在する。二氏の劉盼遂による「年譜」を参照。戴氏についてはそのようなものは傳えられていない點に注意せよ）、祖父乃至父親の親しい教育のもとに、經書を早にたたき込まれている。(4) そして、彼ら自身、充分な能力のもとに、その期待に應え、ほぼ十歳（滿八、九）をそう多くは過ぎぬころには、一應の經書を暗唱してしまっているのである。

むろん、今まとめた點についても、段、王、錢三氏の閒にかなりな差異が存在し、更に、我々が今後に掘り起こすことを待たねばならない資料、そして結局史料には残りようもない無数の事情が有ることを思い見れば、輕々に結論を出す譯にはいかぬが、しかし、先にいささか詳しく紹介した人々の生い立ちに比べる時、この三氏の學問的生い立ちが或る同型性をもってそれらに對峙していることは明瞭に見分けられるであろう。以下、本稿のまとめとして、このことから考えられる、戴震の學問的個性の形と、それがこの時代において果した働きの性格の一斑を述べておきたい。

一一

戴震はまことに素朴に「經書」に出會つたと言ひ得るであろう。彼の故郷徽州府は、當時活躍した「徽商」達の資金を背景に、多くの書院、塾學、義學等が經營され、科擧の登第者數も、全國的に見て高い比率を示す、教育の盛んな地方であつた。⁽²²⁾ だが、我々の今日の如き統一的な近代初等教育制度の存在しない社會にあつては、例えば、「經書」についての教育にしても、一様に高い密度でその教育を受ける機會が存在したと考えることは出来ないであろう。既に見たところ⁽²³⁾ が示すごとく、幼年期の教育としては、それは家庭的に果されることが多かつたようである。「吾が郡は平原曠野少なく、山に依りて居を爲し、東西に商賈し、外に行營して以て口食に就く」という徽州にあつては、幼にしてその穎質を見いだされ、科擧を通じて出世することを期待されるのでない限り、まさに商賈として外郷に出るのが普通の生き方であつたであらう。⁽²⁴⁾ 戴震の家は、隆阜の戴氏一族の嫡宗ではあつたが、早に窮貧し、彼自身、三十二歳の時に、一族の豪なる者に祖墳を侵され、訟え出たものの、その者は財をたのんで知縣と結交し、逆に彼の身に危險が及ばんとしたので着の身着のままに京師へ逃がれるという有様であつた。⁽²⁶⁾ 更に彼の幼年期については、洪榜が「生まるること十歳、乃ち能く言う」と傳⁽²⁷⁾ え、穎質を幼くして見い出されるには程遠かつたことだけは知られるのである。廣く存在した塾學のたぐいにしても、まさに「俗學」(商人となるための読み書き算盤のたぐいであろう)が主であつた⁽²⁸⁾ (3)。そして恐らくは、この地方の人々には、

科擧に登第していく人間はだいたいこういう人間であるという一般的な印象が有り、戴震はまさにそういう人間ではなかったであろう（7、8）。

かくして戴震は獨自に「經書」に出會った。彼にとって、「經書」の世界と言葉は、年端もいかぬ裡に身に入ってしまったものではなかった（王念孫の場合はまさに對蹠的である、ねぼけていても出てくるのである）。そのため、あたかも我々が初等教本を未だ終えぬ程度でゲーテやカントやニュートンなどの原典に向う時の如く（しかも、我々もまた多少のうわさに誘かれて、一刻も早くそれらを読みたいと思うのではないか）、彼には直截に、それが理解困難なものであることが自覺され、それ故にこそ、理解困難な言語記載を讀解せんとする場合の、當り前といえは當り前すぎる、正攻法といえは正攻法的すぎる遣り方を、一から自分で考え、迎らなければならなかった。これが、彼によって、身を以て行なわれた、經學が古典學であることの、更に、それが古典學としてもつべきである着實な方法論の自覺であつたと言い得るだろう。

そしてまた、氣がついた時には身に入ってしまったために、自らの一部として、ほとんど無自覺に經書の言葉を貯わえ、その限りで、あたかも身體の如く、理解するより先にそれを所有してしまっている人々にとって、この一からことだてられた方法的自覺が切り込んで來るものは、まことに強烈な印象を與えずにはおかなかつたであらう（12、14）。この戴震という男の、この強烈な學問的精神によってこそ、皖派、特にその第二のグループの學術は形成されたと言い得るであらう。そしてそのような強烈さと形成力の大きさは、先に分析し今も述べた、學問的生い立ちの彼我における懸隔の上にこそ現われ得たものと考えられるのである。

二

以上なお論ずべくして論じ残した點が多い。特に徽州という土地柄についてはさうである。戴震達の傳記資料を更に精査し、これを例えは、葉顯恩氏の『明清徽州農村社會與佃僕制』⁽²⁹⁾などの述べるところと考え併せて行くならば、なお多く

のことが掘り起こされて来るだろう。だが今は煩瑣の一訂補を行ない以て跋にかえたいと思う。

戴震が生まれたのは、先に言うごとく（九七頁）、雍正元年十二月二十四日である。これは陳垣の『二十史朔閏表』などに檢すれば、西曆一七二四年一月十九日に當る。中國において出版された趙玉新點校『戴震文集』⁽³⁰⁾、何文光整理『孟子字義疏證』⁽³¹⁾のそれぞれの「點校説明」には正確に「生於一七二四年（雍正元年十二月己巳）」と誌し、錢寶琮主編『中國數學史』⁽³²⁾では「戴震（公元一七二四—一七七七年）」と直截に誌す。

ところが本邦においては、戴震を取り挙げ或は言及する論文著述の主旨が、彼の生歿年を、簡単に西洋紀年を用いて「一七二三—一七七七」と示す。だがこれは、西洋紀年のみで示すという形である以上、誤りであるとしか言い得ない。⁽³³⁾宜しく錢氏につくべきである。

私自身はなほ心もとないのではあるが、このような誤りが餘りにも打ち重なるのを見るにつけ、我々は何か或る亂暴な無關心に侵されているのではないかという思いに私はとられる。この幸いにして傳えられている數字の前に立ち止まり、自分達の使用する曆に引き換えて、その一日がどのような一日であったのかを一度は偲んでみるというような用意を怠らぬことこそ、史料のうちに何かを讀もうとする場合に大切なのではないだろうか。小林秀雄の言葉に、死に兒の歳を指折り數える母親の、掛けがえのない愚かさをこそ、最低限の技術として、歴史家は共有すべきだという旨のものがあつたと覺えるが、今私にその思いは深い。

註

- (1) 吉川幸次郎「清代三省の學術」（全集16）、河田悌一「乾嘉の士大夫と考證學」（本誌四二卷四號、一九八四）九二頁、など。

- (2) 日原利國編『中國思想辭典』（研文出版、一九八四）一四

二頁、近藤光男「吳派」の項を參照。

- (3) 張舜徽『清代揚州學記』（上海人民出版社、一九六二）。

- (4) (1)に言う論文、また(2)に言う書の六〇頁、近藤光男「皖派」の項などを見よ。婺源縣は水系的には鄱陽湖に向う

ものに屬し、現在は、江西省に屬す。

- (5) 周子同選註『漢學師承記』（香港商務印書館重印版、一九六四による）「序言」二二頁など。

- (6) 『戴東原先生全集』（大化書局、一九七八、安徽叢書第六期の影印本）所載。

- (7) 洪榜「行狀」、段玉裁『戴東原先生年譜』は翌乾隆二十年に繋げる。今は錢大昕『竹汀居士自訂年譜』に據りて訂す（崇文書店排印本、一九七四）。近藤光男「清朝經師における科學意識」（日本中國學會報四、一九五三）一〇二頁を見よ。

- (8) 梁啟超『清代學術概論』第三章を參照。

- (9) 「古音學の歴史」（中國思想史研究創刊號、京都大學文哲史研究室、一九七七）、「戴震の音學」（東方學五八輯、一九七九）。

- (10) 「均社論叢」九（京都大學中文研究室內、一九七九）所載。なお以下平田氏の論點については、賴惟勤「清朝以前の協韻說について」（お茶の水女子大學人文科紀要八、第三分冊文學、一九五六）を參照。

- (11) 以上詳しくは、(9)に言う「古音學の歴史」を見られたい。

- (12) 尾崎雄二郎「切韻系韻書における韻の排列について」（『中國語音韻史の研究』創文社、一九八〇所收による）。また、周法高「佛教東傳對中國音韻學之影響」（『中國語文論叢』正中書局、一九六三）を參照。

- (13) (12)に言うもの、また、(12)に言う書に含まれる尾崎氏の「漢語史における梵語學」、平田昌司「皇極經世聲音唱和

圖』與「切韻指掌圖」（『東方學報京都五六、一九八四』など）を見よ。

- (14) 藤井宏「新安商人の研究」一一四（『東洋學報三六の一四、一九五三、四』、傳衣俊『明代徽州商人』（『明清時代商人及商業資本』人民出版社、一九五六）、葉顯恩『明清徽州農村社會與佃僕制』（安徽人民出版社、一九八三）、章有義『明清徽州土地關係研究』（中國社會科學出版社、一九八四）、『明清徽商資料選編』（黃山書社、一九八五）など。『アジア歴史研究入門』1（同朋舍、一九八四）三三七、三七三頁、及び葉氏の著書に對する岡野昌子氏の書評（本誌四三卷三號、一九八四）を參照。

- (15) 「梁」の項。

- (16) (10)に言う平田氏の論文、四四—五頁參照。

- (17) 段氏「年譜」。

- (18) 段氏「年譜」丁酉條。安徽叢書第六期、戴震「遺壘」一卷中に見える。

- (19) ことは、「經書」についての初等教育がこの時代の實際において、どうであったのかという問題にかかわる。不學にして專論有るを未だ聞かぬが、明代については、佐野公治「明代における記誦——中國人と經書」（日本中國學會報三三、一九八一）が有って、多くの裨益を得ることが出来る。

- (20) 段氏「年譜」は乾隆七年に繋げるが、今は許承堯の安徽叢書第六期への「序」及び余英時「戴震的經考與早期學術路向」（『論戴震與章學誠』龍門書店、一九七六）一六五頁以下の考證に據りて訂す。

(21) (7)を見よ。

(22) (14)に言う葉氏の書、一八七頁以下を参照。

(23) 『戴震文集』卷十二「戴節婦家傳」の語。同様の記述はこの時代に多く見られる。(14)に言う『資料選編』を見よ。

(24) 『豆棚閑話』第三則「朝奉郎揮金倡霸」に、「明年小主十六歳了、徽州俗例、人到十六歳、就要出門學做生意」、また「父親汪彦……十五六歳、跟了夥計、學習江湖販賣生意」と(上海古籍出版社、一九八三排印本による)。

(25) 『戴震文集』卷十一「族友譜序」。

(26) 段氏『年譜』乙亥條。

(27) 程瑤田「五友記」には「東原生九歳始能言、十五始力學」

と有る。

(28) 明代の資料ではあるが、『太函集』卷七七「荊園記」には「休、歙右賈左儒、直以九章當六籍」と有る。珠算の普及に與つて力の有った『算法統宗』の著者程大位は休寧の人である。

(29) (14)を見よ。

(30) 中華書局、一九七四港版による。

(31) 中華書局、北京一九六一、一九八二版。

(32) 科學出版社、一九八一。

(33) 『アジア歴史研究入門』1、島田虔次「序論」三〇頁を参照。

DAI ZHEN 戴震 AND THE SCHOLARSHIP OF THE WAN 皖 SCHOOL

KINOSHITA Tetsuya

The scholars of the Wan school, which represents Qing dynasty classical studies (*jingxue* 經學) with the Wu 吳 school, can largely be divided into two groups: those who pursued their studies in Huizhou 徽州府 of Anhui 安徽 province, and those who were followers of Dai Zhen after he left Anhui and went to the capital. What in fact was the background to Dai Zhen's academic character such that he was able to found the latter group, generally known to be the Wan school? That is the subject of this essay.

On this subject, I examined Dai Zhen's personal academic history in which, according to his own testimony, he first encountered classical texts only in the middle of his teens. From this point I broadened the inquiry to include the academic background of other scholars. I found that, in the society of that time, there was a big discrepancy in the conditions of primary education, depending on the background of each scholar, that determined the relation between an individual and the classical texts. Within this general discrepancy, Dai Zhen encountered the classics in a unique way, and from this experience, he entered into classical studies. Because of this, he was able to formulate a new type of scholarship that was different from that of people who had memorized the classics from an early age.

THE VARIOUS ANTECEDENTS OF THE SONG DYNASTY MALE HEAD TAX (*SHENDINGSHUI* 身丁稅)

SHIMASUE Kazuyasu

Until now, the Song male head tax was considered to be a descendant of the head tax of the Five Dynasties period or a derivative of the